



“お互いさま”で 支え合う地域づくりを目指して

神河町では、交通事情に対する住民の不安や、高齢者の単身化による孤立感への対応が大きな課題になっている。このたび「第2次地域福祉推進計画」を策定した町社協では、これらを「みんなの問題」として、新たな支え合いの仕組みづくりを進めようと、「全ての人が孤立しないまちづくり」や「お互いさまと言い合える地域づくり」を主な柱に掲げて活動を進めている。

住民の生活ニーズに応える

月1回、町の中心部のスーパーには、たくさんの買い物袋を提げた高齢者らの姿がある。社協の「お買い物送迎サービス」の日だ。住民の主な交通手段は自家用車や町が運行する巡回バスだが、車椅子を使う方が通院したいときや、一人暮らしの高齢者がたくさんの買い物をしたいときは、これらの手段では外出が難しい。このため社協では、住民からの要望を受け、高齢者等を対象に、病院や店舗への送迎事業を“ドア・ツー・ドア”のスタイルで行っている。さらに、高齢化や単身化を背景に、外出支援に限らず、「ゴミ出しや買い物等を手伝ってほしい」というニーズも高まっている。

これらのニーズを受けて、今後は地域の助け合いに関心の高い定年後の男性等を新たな担い手として育成を図るとともに、近隣同士のちょっとした手伝い

「お買い物送迎サービス」を利用する住民。現在、3つの集落でモデル実施中



や見守りをどう広げるかについて、住民との話し合いを進めつつ、「お互いさま」で助け合う地域づくりを目指している。

全集落での見守り活動を目指して

今回の計画策定時に行った住民アンケートでは、「支援が必要になったとき、近所の人にしてほしい手助けは?」という質問に、「声掛け・見守り」と答えた人が7割に上った。これまでも社協では、近隣同士のつながりづくりや見守りのために、ボランティアや老人クラブと共に、集落ごとのミニデイ・サロンの普及や一人暮らし高齢者等への給食サービスの実施に力を入れてきた。

ある集落でのミニデイ。ほぼ全集落でミニデイが開催されている



しかし最近では、見守りニーズが増加する一方で、足腰が弱ってサロンに参加できない人が増えるとともに、給食サービスもボランティアが減少しており、住民から新たな見守りの仕組みづくりを求める声が挙げられている。

今後、社協では計画の重点事業として、地域包括支援センターとの連携により各集落の区長や民生委員・児童委員、老人クラブ、ボランティア等と協議を重ね、モデル地区を指定したり、さまざまな見守りの方法を示したりしながら、全集落で実情に応じた見守り活動の実施を進めていく予定だ。計画策定をきっかけとして、支え合いの地域づくりが一層推進することが期待される。

取材を終えて

「住民アンケートでは、住民同士でできることを模索している人がたくさんいることが分かった。住民と社協がそれぞれの強みを生かして、みんなで地域の課題を乗り越えたい」と語る社協職員。住民と共に生活課題へ立ち向かおうという強い使命感を感じました。

会長から 神河町社会福祉協議会 会長 中野 正義

私たちの住む神河町は、25年先には人口が今の7割以下に減少し、高齢化率は40%を超え、町そのものが消滅してしまう可能性があるともみられています。

今大切なことは、私たちが置かれている現状をしっかり認識し、支え合いや助け合いの精神を育みながら、一人一人が幸せを実感できる地域社会を目指していくことではないでしょうか。

私たちが持っているやさしい心、そして思いやりの心の一つ一つ織り重ね合いながら、生きがいに満ちた魅力あふれる地域となっていくことを願っています。

